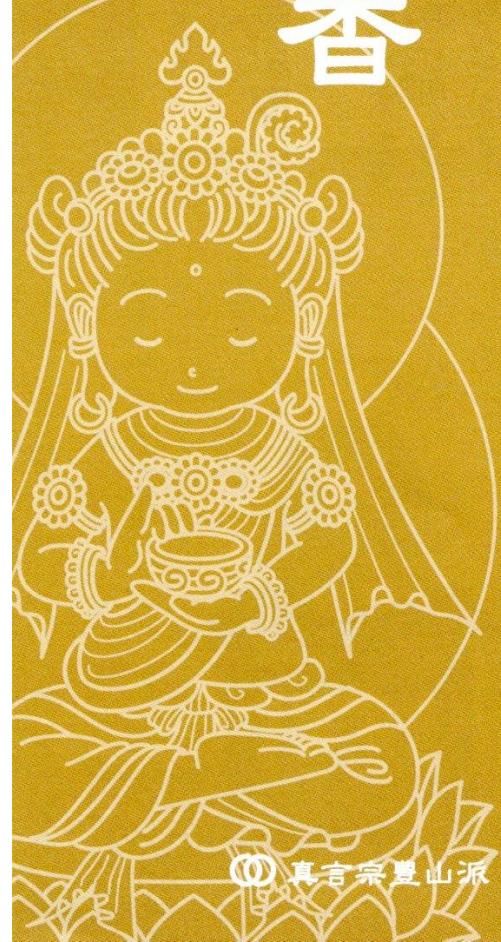


ほとけのこころ④

お香



① 真言宗豊山派

お香



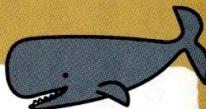
ほとけのこころ④

お香の種類

お香の原料には、香氣に富んだ樹脂・木片・根・葉などの様々な種類があります。インドやインドネシアで多く産出される「白檀」、香辛料としても広く用いられている「丁子」、防虫剤や防腐剤としても古くから使用されている「龍腦」、マッコウクジラの体内で生成される「竜涎香」などです。

代表的な香木に「沈香」があります。なかでも特に質の良いものを「伽羅」と呼び、最高級のお香とされています。

もともとお香は、その原料となる香木を直接火にくべて焚いていましたが、時代を経るにつれて、いま私たちが一般的に使用している「お線香」が生み出されました。お線香の伝来については諸説あるようですが、寛文2年(1662)に、中国福建省福州から長崎へと伝えられ、次第に日本各地へ広まったそうです。最近では、ラベンダー・バラ・レモンなどの香料を含んだ珍しいお線香もあります。亡き方が好きだった香りのお線香を携え、墓前に足を運んでみましょう。



マッコウクジラは抹香鯨なのです

マッコウクジラの腸内では結石ができることがあります。これを貴重なお香として古来より用いてきました。

海上や海岸で稀にその結石が採取されていましたが、その正体は不明だったため、昔、中国ではそれを竜の涎が固まつたものと考え「竜涎香」と名付けたそうです。

このように、お香を体内で生成するクジラであるため、日本では「マッコウクジラ(抹香鯨)」と呼ばれるようになり、そのまま生物学名として定着しました。

クジラの結石をお香に用いたり、また、そのような形状にちなんで「竜涎香」と名付けられたりするなど、古の人の発想や想像力にはなんだか驚かされますね。

身は華とともに落つれども
心は香とともに飛ぶ

弘法大師『続性靈集補闕鈔』

「咲き開いた花がいすれ散りゆくように、私たちの身体もいつかは滅んでしまいますが、心はお香の煙とともに浄土へ昇ることができます」と、弘法大師空さまは説かれています。
お香が燃え尽きても、馥郁たる香りは立ちこめているように、亡き方がこの世を去ったあとも、思い出は色あせることはありません。
この世に残された私たちの心の中には、笑顔の人が生き続けているのです。

お香の功德

仏さまや亡き方に対し、お供物を捧げ、おもてなしをすることを「供養」といいます。

私たちは「水・塗香（手や体に塗る粉末のお香）・花・焼香（お香を焚くこと）・飲食・灯明」を供物の基本とし、特に「六種供養」と呼んでいます。

「六種供養」は、「六波羅蜜」という悟りへと進む六つの修行に相当します。

六種供養	六波羅蜜
水	布施（独り占めしない）
塗香	持戒（決めたことを守る）
花	忍辱（怒つたり嫉んだりしない）
焼香	精進（努力する）
飲食	禪定（心を落ち着かせる）
灯明	智慧（物事を正しく認識する）

なかでも、お香は一度火をともせば、一定の速度で急がず、遅れず、最後まで燃え続けます。このことから、一生懸命に努力をして目的を全うすることや、精進して修行に励む意味もあるのです。

いつの時代も愛されるお香

古代インドでは、酷暑によつて生じる体の臭いを除くために、お香を体に塗つたり、焚いたお香の薰りを体に焼き染めたりしました。またお香を焚くことが、来客に対する大切なおもてなしとされていました。後に、これらの習俗が、仏さまを供養する方法となり、中国、日本へと伝来しました。

日本へ渡来したお香のなかでも天下一と称される「蘭奢待」。このお香は、東大寺正倉院に所蔵されている、重さが約十一キロある巨大な「沈香」です。もともとは今よりもさらに大きかつたようですが、歴代の天皇や将軍が、手柄のあつた臣下へ分け与えたために、徐々に小さくなってしまったそうです。実際に、足利義政、織田信長、明治天皇が切り取った跡も残されています。

このようにお香は、大切な人をもてなすため、また、大切な贈り物として、古来より用いられてきました。命を分け与えてくださったご先祖さまや、今は亡き大切な人たちに、ちょっとといいお香を手向けてみませんか。

お香のマナー

「お焼香は何回?」「お線香は何本?」

お参りに行ったとき、こんな疑問を誰しもが持つことでしょう。宗派や地域によって違いがありますし、マナー・ブックやインターネットを見ても「一様ではありませんが、一回(本)から三回(本)を手向けることが多いです。」などによりおもてなしの気持ちや、感謝の気持ちをもつてお香をお供えすることが大切なのです。



「私の想いを香りにのせて…」